

# 社会資本の活性化を先導する歩行圏コミュニティづくり

## 解決したい課題・研究開発目標

### 【現状と課題】ターゲット「健康寿命の延伸」

◇先行研究=外出頻度の少なさ、歩数の少なさは死亡や要介護状態のリスク要因である。

⇒健康寿命の延伸において「歩いてお出かけ支援」が重要な課題。

◇富山県富山市=コンパクトシティを標榜する地方都市

⇒「歩いて暮らせる拠点集中型のコンパクトまちづくり」

⇒多くの高齢者は行政が提供するユニークな外出サービスを上手く活用し、生き生きと生活。

⇒しかし、足腰が弱り始めると、とたんに歩かなくなり、外出を控える傾向。

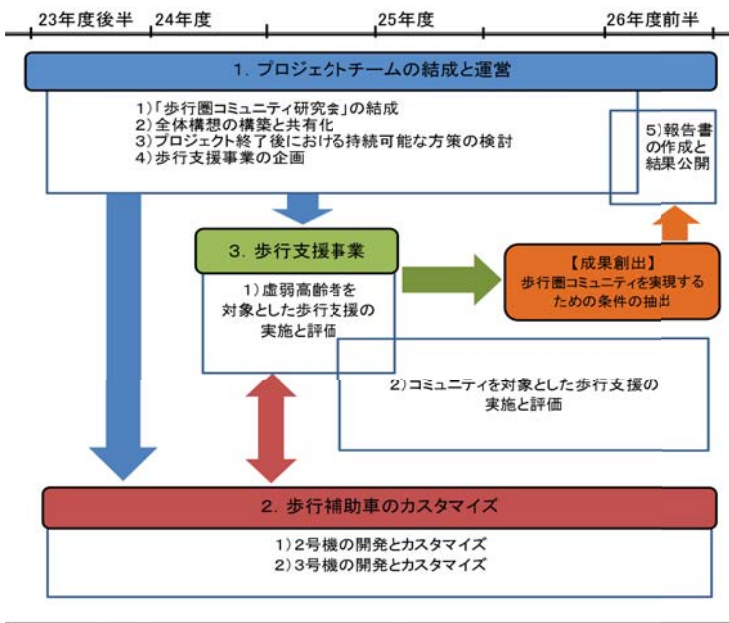
⇒まず、歩行能力を支援することが必要。

⇒工学技術を生かしながら技術に頼りすぎない「歩行補助車」を活用した歩行支援。

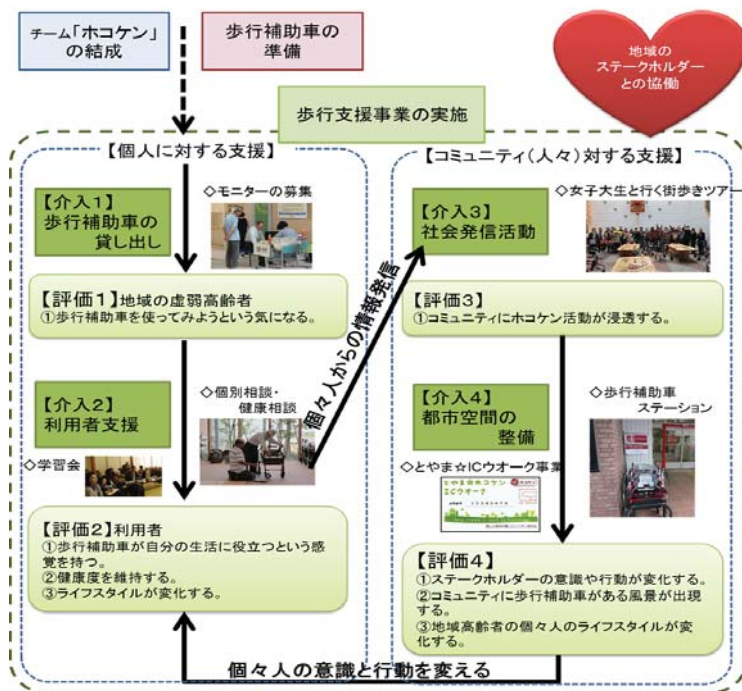
【目指す社会像】「道具」の助けを多少借りながら、自分で歩いて住み慣れた地域(コミュニティ)で、普通の生活をする。

【研究開発目標】元気な高齢者だけでなく、身体が弱くなった高齢者も積極的に街に出て、生き生きと交流を楽しむことができる生活圏を「歩行圏コミュニティ」と定義し、その実現に必要な条件を抽出する。

### 【全体計画】



### 【プロジェクトの展開方法】



## 対象コミュニティ・関与者

### 【対象コミュニティ】富山県富山市



### 【研究開発体制】産学官民の協働

・富山大学歩行圏コミュニティ研究会(ホコケン)

**学:** 富山大学(医学部看護学科、芸術文化学部、人間発達科学部、工学部、地域連携推進機構、学生)

**官:** 富山市(副市長、政策監、都市整備部、環境部、保健福祉部など)、

**民:** 富山市星井町地区住民(自治振興会長、長寿会、歩行補助車モニター)、商店街関係者

**産:** 地元企業

## プロジェクトを通じた主な成果と今後の展望

お問い合わせ先

中林美奈子: TEL/FAX 076-434-7444

E-mail: [minako@med.u-toyama.ac.jp](mailto:minako@med.u-toyama.ac.jp)

### 【プロジェクトの成果】

#### 1. 高齢者の生活を助ける歩行補助車「富山まちなかカート」の開発



1号機  
個人用ツール

2号機  
個人・コミュニティ共用ツール

3号機  
コミュニティ用ツール

#### 2. 歩行圏コミュニティ実現に向けて人々の意識を変えていくプロセス(=ポピュレーションアプローチの方法の開発)

ストラクチャー	プロセス	アウトカム
<p>【どのような場やチームメンバーで「支援」を提供したか?】</p> <p><b>【プロジェクトチーム「ホコケン」の結成】</b> ◆「触媒」(ファシリテーター)の存在 ＜触媒の役割＞ ①メンバーの構成 ・コアメンバーには役割を果す責任と力のある人を選ぶ。 ・多種多様なメンバーでチームを構成する(学部横断/行政各課横断/多世代(大学生~長寿会長)) ②ゴールを共有するための意図的関わり ・地域情報の説明、関連する理論や用語の説明 ・ゴールをイメージとして伝える工夫 ③地区の実態を共通認識するための意図的関わり ・「街歩きコースの設定とその検証会」の実施 ④集団凝集性を高めるための意図的なかかわり ・Face to Faceの集まり ・アサーティブなコミュニケーション</p> <p><b>【地域資源(人)のネットワークが強化される】</b></p> <p><b>【メンバー各々が自分の役割と課題に気づく】</b></p> <p><b>【地域資源(人)のネットワークの強化】</b> ↓ <b>【各々のメンバーが自分の役割と課題に気づく】</b> ↓ <b>【地域の支援力の向上】</b> ↓ <b>【地域資源(人)のネットワークの強化】</b></p>	<p>【どのような内容の「支援」が、どのような方法で提供されたか?】</p> <p><b>【ヒューマンネットワークの強化は、支援提供の仕方の変化を生む】</b> ◆メンバーのアイデアと工夫を基盤にした、持続性に高い楽しいポピュレーションアプローチの実践 ①メンバーの意見を取り入れた歩行補助車の開発。 ②ICウォーク ③歩行補助車ステーション ④女子大生と行くまち歩きツアー ⑤まちなかゆる歩きとやま</p> <p>◆「個」→「コミュニティ(人々)」への支援というサイクルを回す。</p>	<p>【「支援」の結果、市民や地域社会に何が起きたか?】</p> <p><b>【市民一人ひとりの変化】</b> (1)モニターのQOLが向上した。 (2)ICウォーク利用者の健康意識が向上した (3)長寿会長の「主体的行動」を引き出した。「研究終了後も、この活動を主体的に継続していかなければならない」 (4)行政の「協働意識」を引き出した。「これからも大学、地域住民、行政と一緒に暮らしていきたい」</p> <p><b>【コミュニティの変化】</b> (1)ホコケン活動が地区高齢者に周知された。 (2)ホコケンイベントへの参加者が増加した。 (3)星井町長寿会長が自宅で自主的に歩行補助車の貸し出しを始めた。 (4)星井町地区以外1地区で長寿会長が歩行補助車の貸し出しを始めた。 (5)富山市中心商店街(アーケード内の八百屋、百貨店前の広場)に歩行補助車ステーションが設置され、管理運営費が富山市で予算化された。 (6)富山市役所、富山市ファミリーパークに歩行補助車ステーションが設置された。 (4)地元企業(アルミ社)が歩行補助車の製品化に向けて動き出した。</p> <p>さらに発展した成果(市民や地域社会の変化)が生み出される。</p>

### 【今後の展開・展望】

#### 1) 歩行圏コミュニティづくりの継続・実装

- ①社会発信活動の維持
- ②長寿会長が行う自主的活動の支援
- ③他地域への普及
- ④本成果の中長期的評価

#### 2) 歩行補助車商品化に向けての取り組み

- ①3号機(コミュニティ用ツール)の量産化
- ②4号機(個人用ツール)の開発

#### 3) 歩行圏コミュニティの都市文化としての普及発展の唱道

コミュニティ全体に「歩くこと」を積極的に捉える機運が高まっています。

まちで「富山まちなかカート」を利用する高齢者・若い家族連れを見かけるようになりました。



視察や取材も多くあります。



プラチナ大賞・グッドデザイン賞



ますます元気です！！

